

豊後国国崎郡安岐郷における古墳と鉄の文化

水口忠孝

目次

はしがき

第一章 安岐郷の古墳

第二章 国東半島の砂鉄

第三章 安岐郷に於ける古墳と金葉の遺跡

第一節 金葉遺跡の調査

第二節 遺跡の地形

第三節 須恵器の遺跡

第四節 製鉄業と豪族

第四章 宇佐行幸会の淵源

第一節 宇佐の豪族と国崎の豪族

第二節 宇佐行幸会の創始

まえがき

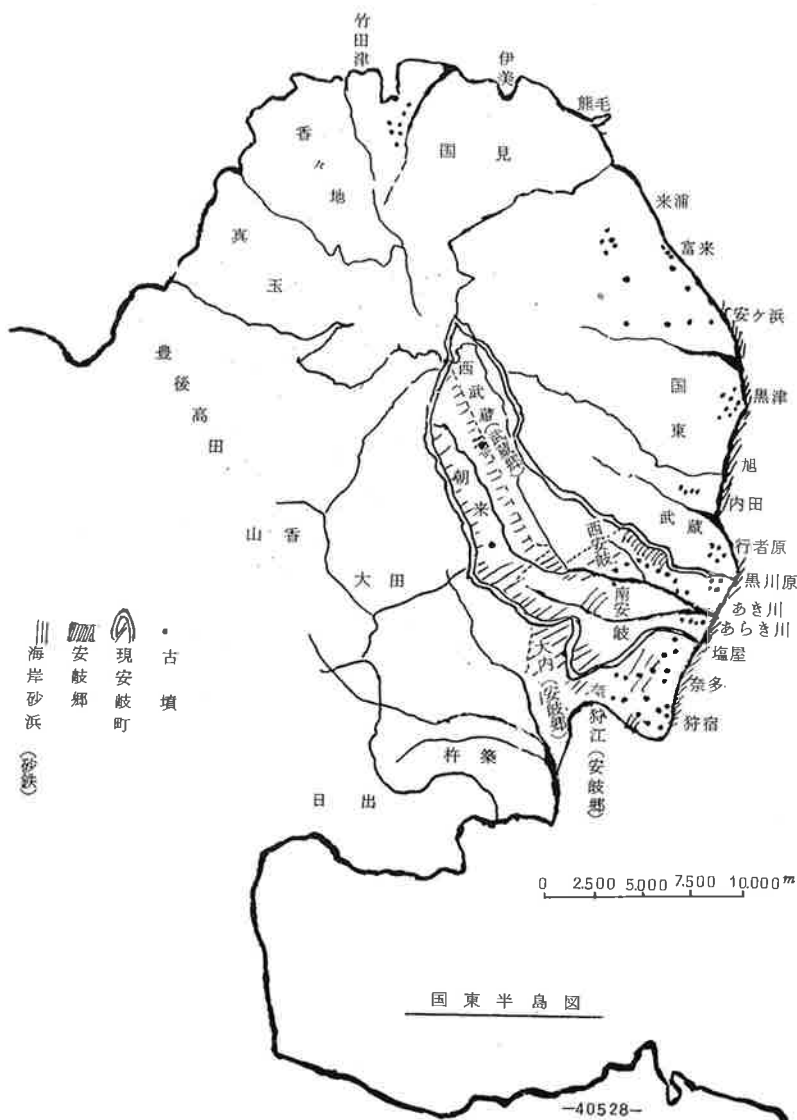
宇佐宮と奈多宮とは、創立の当初から、深い関係があつて、それが、宇佐八幡託宣集に現われ、或は宇佐行幸会となつて、九百年の長い間、実践されて来た。此の国東半島の辺地に、然も四十キロもある此の遠地に、どうしてこんな深い関係が生じたのか。此が平素からの不審であつた。

此の関係は創立当初だけでなく、それ以前からの関係であつたに違いないとの創意に基づいて、探究し始めたのである。

〔両宮、創立前の古墳時代は、大和朝廷の国家統一時代であるから、鉄器の需要が多かつた。多くの古墳中から刀劍の類が発掘された。〕

此の奈多の亀山前方後円墳を中心とした数十の古墳がその周辺に点在する。十余ヶ所の鉄の遺跡と同時代のものであることがわかつて、半島の文化は鉄の文化であり、半島の豪族は鉄の豪族である。半島の古墳は鉄の豪族の古墳であると究明した。

宇佐の地方は早くから、大陸の文化を輸入した先進地である。此の宇佐の豪族が（宇佐氏）豊富な鉄資源を持つ国東の豪族と手を握らない訳が多い。長い間のこの交流が、後の両宮成立に関係の生するのは理の当然で、茲に一文を草した次第である。



国東半島図

-40528-

第一章 安岐郷の古墳

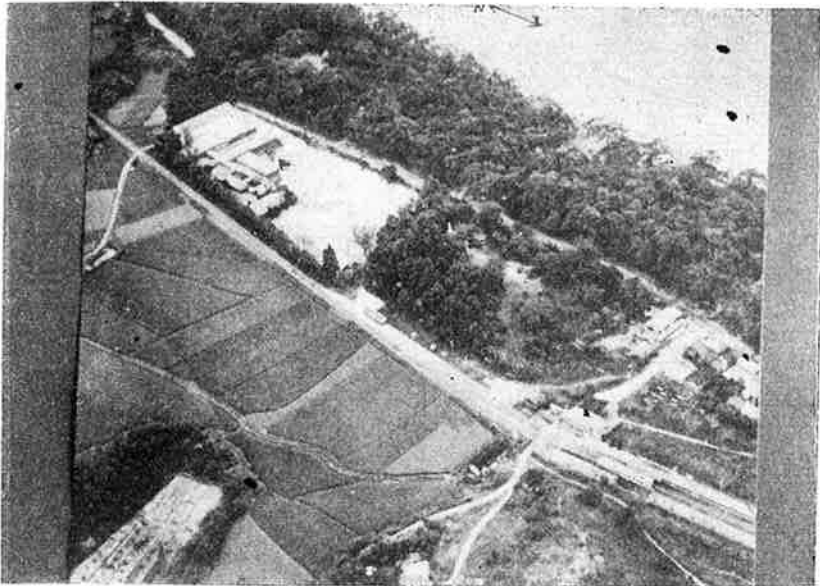
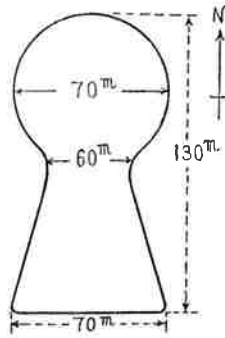
古墳は大和朝廷の國家統一時代三、四世紀から七、八世紀のものであるから、此の田舎の地には何等の文献もない当時の歴史研究上唯一の資料である。しかも一般民衆のささやかな生活を思わせる弥生式時代の土器とは違い、既に國家形態を構成していた時代のものであるから、そこに葬られた人は相當な支配権力者で、その築造に當

っても、延べ數百人、數千人を要している。従つてその大小によつて被葬者の支配力がある程度推定できる。

奈多の亀山の大古墳は、

自然の丘陵を利用し、日本史に出て来る大和の同型の古墳とは必ずしも年代に於いて一致しないであらう。然し多少のずれはあるとしても此の地方に於ける最古最大のものであることは疑いない。

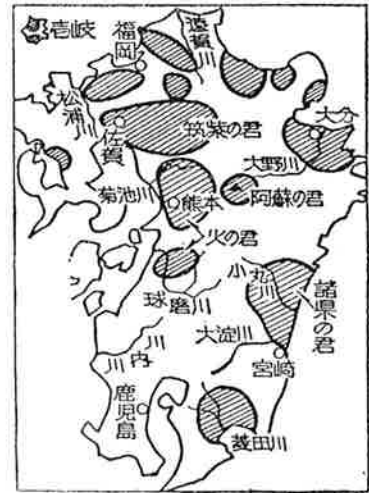
空中から撮影された写真の様に完全な前方後円墳である。此の形を整えるためには、大規模な土木工事の行なわれたことも想像に難くない。別府大学の賀川教授は「県下三大古墳の一つ



上 亀山古墳平面図
下 亀山古墳全景 (岡崎助教授撮影)

である」と、その雄大さと、その整美さを称えていた。

九州の前方後円墳分布図
(岡崎九大助教授による)

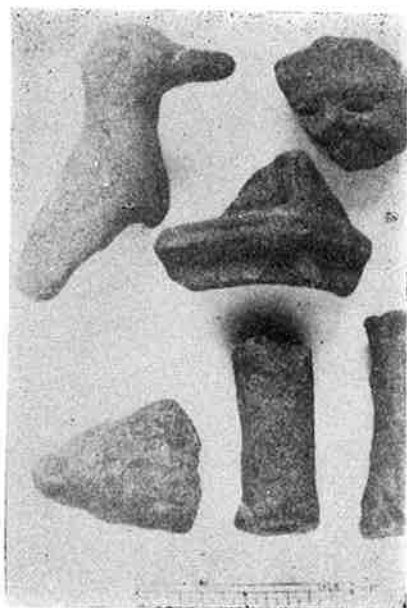


この図は去る昭和四〇年四月、九大岡崎助教授を中心にして完成された九州の前方後円墳分布図で、豪族の勢力を図示したものである。

尚亀山の古墳だけではない。塩屋の塚山巨石古墳は、下川上方古墳として県の史跡に指定されている。その築造に要した人員は莫大なものである。

又平の築山墳輪古墳、何れも丘陵地に築き上げた雄大な古墳で、その威勢を十分に示すに充分である。この外、六十余个の古墳がこの郷内に散在している。^② 国東半島史に載っている東国東郡内の古墳が、百三十余であるから、約半数に近い古墳が、この安岐郷に集中しているのである。その集中状況や新旧大小の古墳によって、当時の豪族の消長や居住の位置がわかるのである。

中野短大教授は「宇佐八ヶ社(田笹社、鷹居社、瀬社、泉社、乙咩社、大根川社、妻垣社、小山田社)のどれにも附近に古墳又は貝塚がある。それは律令制以前、宇佐国造時代の根拠を移した跡である。」とのべている。



築山古墳埴輪

当面の行政からは影を没したけれども、新しくはいった大陸文化を吸収し、その富を貯えた。後に述べようとする奈多の豪族との交渉が始まるのである。

第二章 国東半島の砂鉄

国東半島の砂鉄は、国土資源局の調査によると、大分県内で砂鉄の産地として登録されている大半は東国東郡の中南部の海岸で安ヶ浜、富来浦、来浦、黒津、旭、内田、黒川原、塩屋、奈多である。大東亜の戦時中は勿論戦後今日まで、砂鉄を採収している田中と云う業者が、「此所の砂鉄は全国でも有数な良

④ 又津田博士は「地方的豪族と其の土地の神社との間には、昔から密接な関係がある。豪族は同時に祭主でもあった」と。宇佐宮も古墳亀山に鎮座し、奈多宮も亦古墳亀山の地に鎮座している。豪族の居た所に必ず神社がある。宇佐氏は当初から国造であつたが、律令

制の地方刷新によつて、中央の大神氏がこれに代つた。従つて宇佐氏の勢力は



塚山古墳

質の砂鉄で、国のお役に立てているのである」と云う。最近この砂鉄を採ると軽い砂が浪、風によって浜が移動すると云うので浜主の方から、業者に抗議し、資源局に反対の陳情までしたと云う。

⑤ 大分県史料十巻に浦辺の水軍岐部氏が大夫義長、義鑑二代に亘り、八朔の祝儀として地鉄を贈っている。その礼状が十通も残っている。その中の一通には義鑑の方から地鉄を所望している。「早々に給つて悦喜である」との礼状がある。

此は偶々岐部氏の例に過ぎないが、戦国時代に於ける半島の諸武士が、強力であったのも、恐らく鉄の資源に恵まれていて贈りものにもしたのであろうが、これが唯一の財力であったに違いない。何時の世も同じで、武器の多少で勝敗がきまったのである。大東亜の戦でも日本が飛行機（物量）で敗れた。宗麟が九州で覇をとなえたのも鉄砲を入手したからである。同様に後に述べる大和朝廷の国家統一にも亦必然的に武器刀剣を必要としたのである。

国東半島の北端竹田津に鬼籠まごこと云う所がある。此所は、後鳥羽天皇の二十四番鍛冶の一人刀匠、紀ノ行平の在所であると云う。現在その子孫が居る。部落の中央にはその遺跡があつて、金糞や、タタラ口等が出土したと云う。

⑦ 此の外、「大日本人辞書」刀工系譜によると、徳川時代のみでも、豊後大分郡高田の刀匠、実に六七十人に及ぶ。盛んであつたこの製鉄の資源をどこに仰いだか、今後の研究に俟たねばならない。

此の砂鉄は、単に刀劔のみではなかつた。日用品の鍋釜から農器具まで造つたことは、
⑧ 元應元年、豊後国住人安岐次郎定吉が重い罪を犯した代償の内に釜一口、鍋二鉄輪二本を納めている。又翌元應二年、安岐郷司左エ門なるもの、御輿が両子まで動座されていたのが帰られた帰座料として拾貫文并かま一口なべ二かな一本神納している。

斯の如く神納した鍋釜は、当地で製造したに違いない。然も海岸地帯に限らず朝来方面でも製造したのではないかと思われる。朝来にタタラと云う地名が残っているので推測される。原料をこの奥地に運んだものもあろう。或は又田染方面から出る山鉄によつたとも考えられる。要するに、平安朝以降、鎌倉、戦国、徳川と鉄に関する文献を拾い集める時、半島の鉄は長い

歴史を持っているのである。

第三章 安岐郷の古墳と金糞の遺跡

第一節 金糞遺跡調査

先年来金糞遺跡に興味を持ち、時折里人に聞いては、その都度足を運んで、必ずその熔鋳遺物を持ち帰って、年代による相違はないかと、比較して見るが、別は区別がつかない。然し素人の私でも艶のある熔塊の重いにはまだ相当な鉄分が含まれている様に思われる。それだけに、幼稚な製鉄法であったことがわかる。賀川教授は「此の鉄滓には鉄だけでは銅の成分も相当含まれている」と云う。狩宿部落の庵、屋敷やその山続きにある金糞原に行つて見ると、既に屋敷や畑になったり或は開墾されたりして、当時の模様を偲ぶことは出来ないが、広い範囲のどこもこれも金糞で一杯である。特にタタラ跡と思われる場所には、大きいのは三十センチ四角もあるような熔塊が驚く程沢山土手に積み上げてある。その塊の表の方は熔鋳が冷えて固つたつやつやしさがあるのに反対側の方には赤い焼土が附着している。精煉された鉄をとつた残滓を土間に打ち出したのであろう。

下山口京田部落の谷川に沿うて上つて行くと、程なく左側の蜜柑山につく、もう十数年も前開墾したのであるが、其の際川添の窪地から前述の扁平な熔塊の金糞が沢山出て始末に困つたと去う。今でも土手に積んである。

更に谷間を上ると右側の山は開墾中であつた。ここは熔鋳跡の生々しい遺跡で、直径十五センチもあるフイゴの口が五つも出た。先端の口には熔鉄がくつついて口が小さくふさがっている。又熔鉄の附着した土器片や、弥生式土器の破片、数個、熔鋳炉の底と思われる焼石、それにサンワ様の泥土がくつついている。炉に使用した大きい石がいくつもあつた。これらの遺物はことごとく奈多八幡宮の陳列棚に並べてある。尚如何に多量の木炭を使用したかは、附近の断層に木炭の層があるのでもわ



金糞およびフイゴ

かる。ブルトーズで起こす前その原形を見なかったことは、返えすが
えすも残念である。その遺跡から出る土器を見て賀川教授は「間違
なく弥生式の土器である」と云う。前述のようにタタラ吹きの熔鋳遺
跡が弥生式に時代が続いていることを知り得たのである。

以下は遺跡を紹介して、説明を省略する。

大字奈多字金山、奈多から横城部落に上る道に添うている。南傾斜の
丘陵地帯に金糞が出る。タタラ跡と思わるる所には瓦の様な金糞があ
り、その辺から出水がある。

同奈多字谷川、川に添うて上って行くと、川の流れに沢山な金糞があ
る。

横城部落に平河原の池がある、その池尻の谷一帯に夥しく金糞が出る
此の土地の人は銅糞と云う。又下西本の大將軍宮の入口一の鳥居を越
した所今でも道や川に金糞が散見する。大正の頃参道を改修の際、沢
山な金糞が出たと云う。

赤禿の上手、陣山に近く、たたらの池がある。池が満水すると、タタ
ラの遺跡が水没する。池は後世出来たので、池の下手にも金糞が出る
同じ谷続きに当る八坂社の前にも金糞が出る。

赤禿に安岐町と武蔵町との境界の道がある。その道に沿うて、石渡の
遺跡があって、金糞が出る。老人の話によると狭い谷であるが、その

第二節 熔鋳遺跡のある場所

図示した様に、古墳の周辺に、此等の製鉄遺跡が存在しているのである。茲に両者の関係があるのではないかと疑問を持ったのが、手始めで、次々に同じ時代の遺跡であることが判明して来たことは、前述の通りである。尚前記十余ヶ所の鉄の遺跡は悉くといってよい程、同じ地形にあることである。①山と云うまでには、いかないが、丘陵地帯の中腹の斜面であること。②現在の交通ではなく、その当時の交通要路であったこと。③必ず附近に出水か川があること。赤禿の如きは悉く谷の上りつめた所にある。④云うまでもなく燃料の豊富なこと（松や雑木でなく、樫の木であったこと）

右四ヶ条は製鉄の遺跡に共通した条件であると共に、須恵器を焼く上り竈とも同じ条件である。前者は足踏みタタラ吹きに対し、後者は十度の傾斜を持った煙道である。

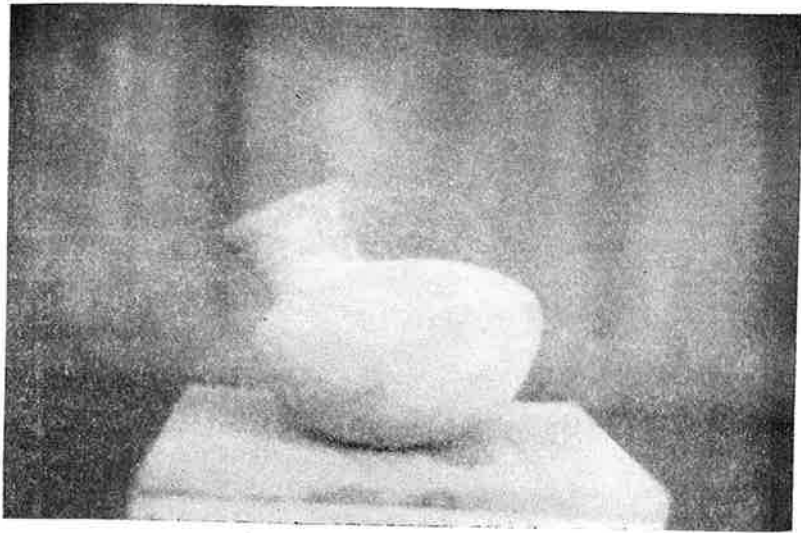
第三節 須恵器の遺跡

①澁口初雄氏宅附近に溜池を掘ったら偶然熔鋳跡らしい遺跡が出た。然し今日まで専門の方々が、色々と意見を發表されたが、確とした決定線が出ていない。澁口初雄氏は「此の谷を上りつめた所から沢山な金葉が出た。此辺には出ない」と、この溜池の掘口にあるのがU字型であると云うけれども一部を欠いだ円形に近い。上部の切れている線を延長すれば、円形になる。U字型の釜跡ではない。対壁の線を結ぶと円筒となり、更に南方の傾斜面に続いている。然も底の傾斜が十度である上り竈そっくりである。然も灰床がない、灰壁の細工がない。一方煙道とした場合外側が赤く焦げている。

中村の古墳から相当大きい須恵器が出ている。須恵器も弥生式末期の土器で、古墳時代に続いている。ここらで焼いたことも考えられる。「窯業の職人も鉄器の職人も必ずしも別人ではない」と賀川教授は云っている。

未だタタラ吹き熔鋳跡を発見しないけれどもその遺跡を見、諸条件を考えた場合、熔鋳跡の位置、熔鉄の流れ口、足踏のフイゴの取り付け等想像して、当時の大掛りの製鉄業の有様を偲ぶのである。

第四節 製鉄業と豪族



須 恵 器

小国分立から大和朝の国家統一に当って、何より必要なものは武器
器具である。又弥生式時代以来既に農耕技術が発達して、鉄農機具が
使用されるようになった。かかる時代の要求に応じて、天然の資源で
ある豊富な砂鉄に気のつかない筈がない。

関東半島の豪族は、此の鉄資源の開拓者である。①その砂鉄の豊富
な場所。②製鉄に適した場所。③製品運搬に当って、海陸交通の要衝
であること（後に出て来る御託宣の中に「応神天皇諸国巡狩の際、伊
予の三机から奈多の御着江を往来する時云々」のように奈多は、四国
九州をつなぐ唯一の要津である。今日でも機械船で出漁している当地
の漁夫も、此の瀬戸口から出入する激しい干満の潮流と風とを利用し
ているのである。）

此等の三つの条件を具備しているのが安岐郷である。ここに豪族が
集り、勢力が増大して来るのも当然で、古墳が安岐郷に集中した所以
もここにあるのである。此等の豪族はお互に提携し、統合して、ここ
で政治も行われ、祭祀も行なわれていたものと思われる。宮地博士は
「北九州一帯は比咩大神を氏神として祀った」と。ここの豪族も比咩
大神を土地の神として祀っていたことは、後に述べる託宣の通りであ
る。

第四章 宇佐行幸会の渊源

第一節 宇佐の豪族と国崎の豪族

当時の宇佐地方は前述の様に、大陸文化が早くから浸透して、広大な仏堂伽藍が建立されている。かかる文化の先駆者で、支配階級である宇佐氏は、大神氏に圧迫されていた関係もあって周辺の国崎地方の豪族や、宇佐山中部の豪族とも手を握ったことは、自然の道でもあった。此が後に出て来る法運で国崎半島六郷に修業道場を開拓した所以でもあった。

¹²文徳天皇の斉衡二年、能行は仁間の修業した跡を尋ねようと、先づ宇佐の神宮寺に一番近い津波戸の石室にこもった。ここから始めて、西三須、最後が奈多の神宮寺であった報恩寺に一番近い横城の東光寺に終っているのである。六郷満山伝道の径路も宇佐から奈多に及んでいる。

斯様に宇佐氏を始め、宇佐の豪族は、この安岐の豪族によって貴重な鉄の資材を入手することに如何に努力し、苦心したかは、政治面に宗教面にその一端を知ることが出来るのである。後宇佐氏の祀っている比売大神と、大神氏の祀っている八幡ノ神との合祀の妥協が出来たのが神龜二年で、今日の宇佐八幡宮創立となったのである。奈多の豪族は従来比咩大神を地主の神として祀っていたのに、宇佐に此の比咩大神を祀られ、宇佐の応神天皇を迎えて、天平元年宇佐公基を官司として奈多宮を創立した。

此の間の消息を詳述すると、宇佐八幡御託宣には、奈多に関するものが甚だ多い。天平年中の託宣に「比売大神示現して国崎郡に住す」とか、又託宣に「¹³比売大神は前に国崎郡に住めり云々」倭名抄「国崎郡は豊後国国崎郡にして奈多の所在なり」と此等の神託によると、宇佐宮の御祭神である比売大神は、最初は国崎郡に示現して、今は宇佐宮に迎えているのである。と此の託宣の発せられた当時の実情を考察したい。

思うに、宝庫である鉄の資源に対し、幾度か足を運ばせたことは云うまでもない。政治的な駆引もあったであろう。宗教的

な取引も行なはれたであろう。かくして此の国崎に祀っている比売大神を共に拝んだこともあったろう。

斯る状況下に於いて国崎に比売大神が示現したり、宇佐に祀ったりする託宣が下さる。不思議ではないのである。或は此の資材が遠く四国を経て畿内の方へ渡ったことも想像に難くない。^⑬奈良の大仏の開眼式に宇佐八幡が上洛した際も奈多を基地として往復されている。

斯の如く宇佐の豪族は国崎を足場にして、遠く四国を経て近畿地方にまで活動されたのである。

第二節 宇佐行幸会の濫觴

^⑭ 孝謙天皇天平勝宝元年、宇佐公牛人が、主神に任せられた年で、長い間大神氏に圧倒されていた宇佐氏としては、司祭者（宮司）の威信を示す意味も多分にあつて、縁故の深い奈多に神幸したのである。

又称徳天皇の天平神護元年大尾山に八幡宮の御遷宮があつた時、旧神体は奈多の浜に遷幸なされたのである。此も主神宇佐公池守の時で、もともと宇佐氏とは縁故の深い地であるが故に、司祭者の威信も示す意味も含まれていたことであろう。終に四年に一度行なうことになり、更に六年一度（卯、酉）、新神体が奉造されて宇佐宮に納まると、旧神体が奈多宮に遷幸になると云う式年の大祭となつたのである。宇佐行幸会は、かくして創まり、九百年の長い歴史を生んだのである。

注 ① 松原古墳 大分県史跡指定

② 河野清美氏著 国東半島史下二八五頁

③ 中野幡能氏著 宇佐八幡発現に關する一考察

④ 中野幡能氏著 八幡信仰の二元的性格

⑤ 大分県史料10 岐部文書一六二頁

為八朔出祝儀、大刀一腰并切。金送給候。祝着候、自是太刀一腰両種進候、只嘉例斗候、恐々謹言

八月一日

義長（花押）

岐部木工助殿

以下九通全様の文面なるも切金とも、切鑿、切鑿、切鑿、切鑿、地鐵、様々な文字を使用している。

⑥ 大分県史料19 一七九頁

地鉄のこと申候処早々給り候委細は塩手兵部申すべく候

義鑑

岐部能登殿

⑦ 大日本人名辞書五卷 刀工系譜一五九頁

⑧ 大分県史料3 永弘文書一一九三頁

元応元年二月七日豊後国住人対安岐次郎定吉、依云輕社敵ニ神訴在レ之神與御事来繩郷之内至高森山ニ御動座、并大神宝フタコ山ニ御動座同社頭御閉門、在之、同年七月廿九日御帰座畢云々

安岐郷料物七貫……釜一口、鍋二、鉄輪二本……

⑨ 武蔵町史一〇一頁 赤禿製鉄遺跡

⑩ 八幡宇佐宮御託宣集 小倉山社部 天平神護元年

吾昔伊豫国宇和郡往来ノ時豊後国国崎郡安岐郷奈多濱辺海中大石有吾渡著気安云々

⑪ 宮地博士著「八幡宮の研究」

⑫ 河野清実氏著「国東半島史上」16頁 能行の修業

⑬ 中野幡能氏著「宇佐八幡発現に関する一考察」

⑭ 「八幡宇佐宮御託宣集」天平中 宇佐八幡宮託宣曰比賣大神示現して国前郡に住す。

⑮ 「」 天平中 宇佐宮ノ大神託宣アリ曰比賣大神前に住めり玉依姫也

⑯ 石清水八幡文書

⑰⑱ 中野幡能氏著 宇佐仏教と虚空蔵寺

昭和五・六年頃の調査にて、所有者は現在移動がある。番地の不記入は其後発見

名称	個数	町村	大字	宿	字	地番	所有者
塚田古墳	一	旧奈狩江村	狩	宿	坂川	二二一五	伊東寛外二名
権現山古墳	一	全	全		東	六六五	足立 利功
手島古墳	一	全	全		里	四七一	手島 捨治
塚本古墳	一	全	全		全	五一四	塚本 呈治
観音堂古塚	一	全	全		大塚	八六六	仲東 喜平
大塚古墳	一	全	全		全	七六六ノ一	足立石男外一名
大塚横穴	一	全	全		全	八五九	伊東 米作
原ノ古墳	一	全	全		全	九二四	全
原ノ古墳	一	全	全		全		伊東千代蔵
大半古墳	一	全	全		大半	一〇五一ノ八	木元亀太郎
札幌古墳1	一	全	全		札幌	一七六四	手島 竹男
全 2	一	全	全		全	一七三八ノ二	手島 マツ
白石古墳	二	全	全		白石	一六一六ノ二	手島 九八
三塚古墳	三	全	全		三塚	一四五四 一四三九ノ一	秦 長蔵
龜山古墳	二	全	全		龜山	二二一ノ四	奈多 宮

千人塚古墳	一	旧安岐町	下原町	清水	一〇二 一〇一	足立周吉外一名
田中古墳	三	旧南安岐村	西本	清水	一〇二 一〇一	足立周吉外一名
黒川原古墳	六	全	全	カッラ	七八〇 七八一 七七〇 略	中山繁蔵外三名
庚申古墳	一	全	全	本丸	三二五	河野 勝平外七名
大師堂古墳	一	全	全	天主	三〇二	天満 社
小丸古墳	一	全	全	小丸	三〇九	本多 房吉
丸山古墳	一	全	下原	町	三〇六	河野伊勢太郎
中村古墳	二	全	馬場	中村	六一一 一	高木 幸造
平月山古墳	一	全	馬場	平		
荒巻古墳	一	全	全	荒巻		久保 貞雄
心月寺古墳	一	全	全	塔ノ本	六七二	心月 寺
倍塚古塚	二					
塚山古墳	一	旧安岐町	塩屋	塚山	一五九八	松原 惟一
志口古墳	二	全	全	志口		小川 重徳
小川古墳	一	全	全	全	二二八〇 ノ二	小川 重徳
妙見山古墳	一	全	全	全	二二四五	小川 磯吉
庚申塚	一	全	全	室屋	二二九〇 ノ一	小川国作外二名
岡山古墳	一	全	全	岡山	一二四三	神島忠友外二名

